

## 令和元年度第1回北海道立函館美術館協議会会議録

- 1 日 時 令和元年9月13日(金) 13:30~15:00
- 2 会 場 北海道立函館美術館 講堂
- 3 出席委員 仲井会長、木村副会長、大場委員、川島委員、小宮委員、酒井(康)委員  
酒井(里)委員、進藤委員、武井委員、中村委員、二階堂委員  
(欠席委員：堀田委員)
- 4 傍聴者 報道関係者1名(函館新聞社)
- 5 議 事

### (1) 報告事項

#### ア 平成30年度事業実施状況について

事務局：資料1に基づき説明。

委 員：質疑等なし

#### イ 平成30年度道立美術館評価に係る評価結果について

事務局：資料2及び資料2(補足)に基づき説明。

委 員：教育普及プログラムの参加者数は、1万8千人を超えているが、常設展の観覧者数よりも多い。また、ソーシャルメディアの投稿についてだが、これはSNSによる発信だと思うが、今の大学生はFacebookはほとんど使わず、Twitterやインスタグラムのほうを使っていると聞いている。Facebookはどうやらおじさんの告知の場になっているようだ。このことを踏まえると、Twitterやインスタグラム(Instagram)でも投稿をしたほうがよいのでは。

事務局：ホームページにしてもFacebookにしても道のルールがあり、一定の制約がある。実は3年ほど前に館でFacebookを始める前に、Twitterについても道に申請したが、当時Twitterは控えたほうがよいとの道の判断があり、Twitterは導入できなかったという経緯がある。現時点において、Twitterの申請が可能かどうかあらためて道に確認を行ってまいりたい。

委 員：「特別展示の充実度」の中にリピート率があるが、59.1%とやや低い状況となっている。これには何か要因があるのか。

事務局：展覧会の内容によるものと考えられる。例えば、著名な作家の展覧会であれば、普段あまり美術館に来られない方の割合が増え、少し知名度が低い作家であれば、逆に普段から美術館に来ていただいている方の割合が増えるといった傾向があるように思われる。

委 員：昨年度の道立近代美術館の観覧者数は37万人強であった。一方、函館美術館の観覧者数は5万人。札幌市と函館市の人口を比較すると、札幌市は函館市の約7倍であるので、かなり検討している数字ではないかと思う。また、教育普及事業については、昨年度1万8千人の参加があった。学芸員の人数は3名であるが、1人当たり延べ6千人の方に対処していることになる。これは大変な労力である。当館の教育普及事業については高く評価されているが、積極的にこの数字を公表して、美術館の活動のアクティビティの高さをアピールすべきで

ある。

「調査・研究の充実度」については、教育普及事業の負荷がかかっているのではないと思うが、展覧会を企画したり、事業を運営するには、大変な労力を使う。一方でそれらをなすためには、研究活動はとて重要である。道立近代美術館では、新しく立川館長が就任されてから、中期計画について言及がなされている。中期計画を立案し、中長期的な視点からの議論もされているようなので、近代美術館に右にならえということではないが、函館美術館でもどこかの時点で、中長期期的な視点で議論し、その中で調査研究についても整理していくとよいのでは。

事務局：今、ご提案のあった中長期的な計画の立案についてであるが、当館としても中長期的な視点をもって対処しなければいけないと思っているが、なかなか形にすることができない状況にある。これについては今後検討してまいりたい。

また、「調査・研究」があまり進んでいないのではないかというような評価になっているが、学芸員による調査・研究をどう評価するかというところに視野の狭さがあって、それがうまく反映されていないのではないかと、今のご意見を伺って感じた。例えば、現在開催中の「球体のパレット展」については、2年半前から準備を進めており、必ずしも紀要や研究論文を発表するという形ではないにしても、その調査研究の成果が展覧会として実現している部分がある。それをうまく「調査・研究の充実度」の定性評価に活かしていない部分もあったと反省している。もし、教育普及事業に時間がさかれて、調査研究が進んでいないのではないかという評価をされるとすれば、それも含めて実際に現場で当たっている者の実感としては少し違うのではないかと思う部分があるので、今後、定性評価の仕方については、館の中で改めて検討してまいりたい。

## (2) 協議事項

### ア 令和元年度運営計画について

事務局：パワーポイント及び資料3に基づき説明。

委員：学校でも計画の数値目標を立てているが、なかなか実態とあった目標を設定することは難しい。展覧会の観覧者数にしても、目標設定が実態と比較しても微妙に設定されているのはすごいと感じている。どのように数値目標を立てているのか教えてもらいたい。

事務局：展覧会の観覧者数の数値目標については、過去の似た展覧会の観覧者数を参考にして設定している。昨年のダリ展については約1万5千人だったので、今年のミュシャ展についてはそれに近い1万4千人という設定をし、最終的には、その目標値に近い方々に観ていただいた。

委員：展覧会の観覧者数が数値目標を超えれば、当然収支余剰金が生じると思うが、通常、余剰金が生じると道に余剰金が入る仕組みが考えられる。恐らくそのために数値目標を設定しているのではないかと思うが、収支余剰金はどのように処理されているのか教えていただきたい。

事務局：特別展については、道新さんと一緒に行う実行委員会方式の展覧会と道の予算

だけで運営している展覧会の2つに分かれるが、実行委員会方式の展覧会については、収支はあくまでも実行委員会のほうで整理されるので、道のほうには収入としては入ってこない。道の予算だけで運営している展覧会の収入については、そのまま道の収入になるが、民間企業のような収支とは異なり、展覧会の予算は予算として組み、収入は道により多く入ることに越したことはないが、結果的にその予算に見合う分だけ収入が入らなくても、それはそれで道の社会教育的施設として、道民の方に展覧会を観ていただくことが我々の使命であるので、収入を必ず予算に見合う分だけあげなければいけないということではない。数値目標は、過去の展覧会に照らしてどのぐらいの数値が見込まれるかという視点で設定している。

委員：実行委員会方式の展覧会について、数値目標を設定して、それを超えている場合、恐らく収支余剰金が生じていると思うが、その収支余剰金はどうなっているのかということに関心がある。道新さんは新聞広告などで紙面を割かれており、その分も換算されていると思うが、道民として興味がある。

事務局：実行委員会方式の展覧会の収支については、このたび、北海道の包括外部監査において、今ご指摘のあった視点で報告書がまとめられており、すでに道のホームページ上でも監査結果が公表されている。当館においても、その監査結果に基づいて、来年度以降の実行委員会方式の展覧会に向けて検討を行っているところ。

委員：展覧会の観覧者数は、学校であれば宿泊研修などで来た子どもたちは展覧会を無料で観覧できるが、そういった子どもの数も含まれているのか。

事務局：含まれている。

委員：今月行われる「ナイト・ミュージアム」は、どのようなものかお聞きしたい。例えば、海外などでは、照明をいつもと違う方法でつけていつもと異なる趣にしたりすることがある。また、ワークシートとはどういったものか。

事務局：これは「はこだてカルチャーナイト2019」として美術館が参加するもので、夜間開館ということになるので、「ナイト・ミュージアム」とネーミングした。ワークシートについては、常設展をただ押し流されるように観ていただくだけでは残念なので、これはどこにあるのだろうかと探し出すような方式のワークシートを予定している。ワークシートを使うことにより、無料で常設展示を観るということだけでなく、何か達成感が得られるのではないかと考えている。

### (3) その他

#### ア インバウンド対策について

事務局：資料に基づき、館内の案内標記等の英語表記、外国人観覧者数の把握、クルーズ船観光客への対応及び今後の対応について説明を行った。

委員：美術館にはWi-Fi環境はあるのか。

事務局：外国人の方にとってもっとも重要なのは、その施設でWi-Fiが使えるかどうかであるが、当館にはWi-Fiを設置しているので、来館された方は簡単な操作でWi-Fiをご利用いただける。

## イ トイレの洋式化工事について

事務局：これまでも委員の方からご意見をいただいたり、アンケートの中でも要望をいただいていたが、今年9月初旬に美術館のトイレ個室を全て洋式化するための工事を行ったので報告する。これまでトイレの個室については、洋式化されていたのは男女とも3つの個室のうち1室のみであったが、残りの2室を洋式化し、全ての個室が洋式になった。

## ウ その他（全体を通しての意見）

委員：美術館は敷居が高いというイメージがある。今回、協議会委員として参加させていただいたが、こういった機会がないとなかなか美術館に来ることはないと思った。しかし、美術館の活動状況に関するお話を聞き、教員向けの研修や体験事業など様々な取組が行われていることがわかり、大変参考になった。平成30年度の事業実施状況書の中に、「鑑賞学習用支援ツール活用授業」と記載されているが、その中身について少し詳しく教えていただきたい。もしかしたら今金町でも同じようなことができるのではないかと考えている。

事務局：せたな町では、これまで小学生を対象とした「素敵にアート教室」というのが行われてきたが、昨年度と一昨年度において、美術館の学芸員による講義についての依頼があった。内容は、アートカードを使い、アートについての基本的な知識を取り入れ、さらにそれを生かして実際に造形してみようという取組。もともと造形教室だけであったが、前段の部分を美術館の学芸員が担当した。今年度はまだお話が来ていないが、今金町さんからお声がけいただければ、仕事として参加させていただくことは可能。ただし、予算の関係上、せたな町さんのように美術館まで公用車で送迎していただくなど、旅行方法についてご配慮いただけるとありがたい。

委員：実際に実施するとした場合、事前に中身について協議していただけるのか。

事務局：せたな町の場合は、日本画の顔料で暑中見舞いのハガキを作るという造形内容をお考えになり、それに合ったアートカードを選んで、子どもたちにゲームをしてもらえないかというお話であった。このように事前にご相談いただければ、協力させていただくことは可能。

委員：美術館のギャラリー・ツアーに参加することがあるが、ギャラリー・ツアーで解説を聞くと、非常に興味深く、楽しく作品を拝見することができる。ギャラリー・ツアーの解説内容を凝縮したものを何かの形で発信できれば、来館者の増加につながるのではないかと。函館市では出前講座という形で、数人のグループで申し込むと、市の職員が行政内容について説明に来ていただける。特別展の内容についても、時間帯はどうしても夜間になってしまうが、要請をした場合に職場まで来てお話をさせていただくことは可能か。できれば映像もあると非常にわかりやすい。先ほどインスタグラムの話も出たが、最近は映像が主流になってきている。映像を使って説明していただくと来館者の増にもつながり、また芸術の認知度も高まるのではないかと。

事務局：学芸員の講師派遣については、団体の代表者のお名前、館長あてに文書をい

ただければ可能である。これまでも、北斗市教育委員会からの依頼により老人大学の授業として講義を行ったり、茶道の団体からの依頼により、田辺三重松や岩船修三についてお話をさせていただいている。これらは美術館のPR活動の一環として実施できるので、気軽にご相談いただきたい。

委員：先ほどトイレの洋式化の話があったが、ウォシュレットも付いているのであろうかとも思いながら聞いていたが、以前に私が当時の窪田副知事にもお話した経緯もあったので、トイレの洋式化が実行されてよかったと思っている。カルチャーナイトは、商工会議所の青年部が中心となって行っている。美術館を含め様々な施設にご協力いただきながら、スタンプラリーを実施し、市役所や五稜郭タワーなどをゴールとして素敵な景品をプレゼントすることになっている。

委員：今回初めて協議会に出席したが、美術館では様々なイベントや催しが行われているので、あらためて子どもと一緒に来てみたいと思った。

委員：函館美術館というよりは教育委員会の話になるのかもしれないが、先ほどのお話にも出たように、恐らく美術館は敷居が高いと感じている人が多い。例えば、そういう方たちに無料チケットを配っても来る人よりも来ない人のほうが多いのでは。その理由は、北海道や日本の美術教育が大きく関係しているのではないかと。外国の例になるが、フランスでは、小さい頃からルーブル美術館で絵を前に意見を言わせるなどして、芸術がフランス人の誇りになっていっている。自分の国のアイデンティティが芸術であると思える理由は、その人たちが小さい頃から充実した美術教育を受けていたことと大きく関係している。一方で、北海道では、美術教員は足りないというか臨時での募集が多く、また、美術教員が少ないので学校で美術の授業が行われていないところが多いと聞いている。美術の授業を行うだけで美術の好きな子どもが増えるわけではないが、美術に興味を持ってもらうための授業をすることが大事だと思う。美術や芸術に関する授業が減らされている中で、美術館に人が来ないから美術館の予算を減らすということについては矛盾を感じている。そのような状況の中で函館美術館はやれることの以上のことをやっていると思う。

委員：学校の中で専門の教員はいなくても、美術館の鑑賞授業や研修でお世話になりながら、我々教員はこれから一生懸命やっていかなければならないと思っている。

委員：協議会委員をして長くなるが、毎年意見を言わせていただき、現在においては学芸員の方にワークショップや連携事業など数多くをイベント実施していただくようになった。イベントによっては参加人数にばらつきはあるが、どのように一般の方に周知を図っているのか。ホームページや新聞以外の方法もあると思う。例えば、五稜郭地区の連携したスタンプ・ラリーでは、チラシのようなものを連携施設に置かれたのか。そのあたりを教えていただきたい。

事務局：教育普及事業のPRは、基本的にホームページで行っているが、北海道新聞の「みなみ風」に掲載していただくと絶大な効果がある。これら以外では、函館市の「ステップアップ」に掲載すると反応がすごくよい。また、幼児向けには、

我々職員の自宅の近くにある保育園や幼稚園に、あらかじめ家庭数を確認しながら、チラシを持参するなど、地道な営業活動を行っている。五稜郭地域の5つの文化施設を結んだスタンプ・ラリーについては、ダリ・テーリングの時はダリの顔を、今回のミュシャ・テーリングの時は女性の横顔をあしらったのぼりを立てて、目立つような印を置いた。各施設にはテーブルを用意してもらい、その上にスタンプカードとスタンプを置いて自由に押せるようにし、最後のゴールの函館美術館で5つのスタンプが集まると、今回の場合は星形のクッキーと展覧会の半額券が当たるという設定にした。

委員：小学校の教員であるが、前回アートカードを借用できるとお話を聞いたので、実際にアートカードをお借りして、7月に5年生と6年生の図工の授業で使用した。鑑賞の時間はなかなか取れない。一番の理想は子どもたちを美術館に連れてくること、二番目は作品を学校に持ってくることだが、現実的には不可能に近いので、アートカードはとてもよいアイデアである。保護者の方が美術に興味がない、子どもたちが美術館そのものの存在を知らないなどの状況を考えると、学校教育はとても重要だと自分でもすごく感じている。実際に教室でアートカードを出すと、子どもたちの反応はすごくよく、こういう絵が函館にあるのだととても興味を持ってもらえる。アートカードの中で最も人気のあったのは、函館の西部地区の冬の風景を描いた絵であった。あとはアートカードに複数の使い方があれば授業で助かると感じた。